



之を楽しむ者に如かず'

江藤茂博編『生きる力がわく「論語の授業」』（朝日新聞出版、2013）から、引き続き引用してみよう。

*

孔子は弟子たちが師である自分から必要な知識を学びとればそれでいい、と考えていたわけではありません。単なる勉強で身につけられるような知識は、あまり評価していないのです。もちろん、学ばないものは論外だとして、孔子は学問については、自分が之を楽しむものであることの大切さを指摘していました。

「好きこそものの上手なれ」ということわざがあります。それが好きならば、努力もつらくならないし、すぐに上達するものだという意味ですが、もちろん勉強学問にもそれが当てはまることは想像できます。

しかし、孔子はそれ以上のことを言っています。

子曰、知之者不如好之者。

（子曰わく、之を知る者は、之を好む者に如かず。）

好之者不如樂之者。

（之を好む者は、之を楽しむ者に如かず。）

この孔子の言葉は、学びの本質論ではないでしょうか。知っている者、つまり知識を学ぶ者は、それが好きな者に及ばない。それが好きな者は、之を楽しむ者に及ばないと言っていました。

こうした考えのもとで、学ぶだけでなく孔子を中心とした学問を楽しむ師弟関係が形成されていたのでした。努力して学問に励むの

は当然のことで、さらにそれを極めた孔子ならではの学問論が、ここに示されているのです。（pp27～28）

*

学問は「なぜ」から始まります。なぜ人は生きるのか、なぜ人は争うのか。それに合理的な回答を与えようとするのが学問であるとするならば、それには客観的で合理的な思考が思考が必要です。しかしながら、儒教の教えにおいて、また極端な言い方をすれば中国の思想においては、そのような合理的で客観的な真実を追いかけることはあまりありません。（例えば）「孝」は無条件で守ることに意味があるのです。「ならぬものはならぬ」という会津の日新館の教え、有無を言わせぬ決まりの遵守が、儒教の本質にはあるのです。

それは、近代的な思考、合理性と客観性を求める思考とは異なるものです。しかし、中国の王朝を二千年にわたって支え、さらに日本人の精神性に大きな影響を与えた儒教は、合理性や客観性とは異質の存在意義を持つものです。有無を言わせない価値への信頼が、儒教的学問の前提にあるからです。

礼の重視、内実を守るための形の重視を説く儒教の教え、三千年を生き抜いた『論語』の知恵は、社会や家と格闘しながらも、人として生きる道を模索する青年期のみなさんに、何がしかのヒントを与えてくれるのではないかと私は思うのです。（pp63～64）

*

現代もさまざまな入門書が刊行され続けている『論語』。それだけの価値があるということだろう。楽しみながら読みたいものだ。